

社会技術研究開発事業  
令和4年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム  
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」  
「社会的養護経験者（ケアリーバー）の社会的孤立を防ぎ、  
支援と繋がりながら自立を支える仕組みを創る」

宮地 菜穂子  
(同朋大学 社会福祉学部 准教授)

## 目次

1. 研究開発プロジェクト名.....	2
2. 研究開発実施の具体的内容.....	2
2-1. 研究開発目標.....	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン.....	2
2-3. ロジックモデル.....	3
2-4. 実施内容・結果.....	4
2-5. 会議等の活動.....	14
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況.....	14
4. 研究開発実施体制.....	15
5. 研究開発実施者.....	17
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	19
6-1. シンポジウム等.....	19
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	19
6-3. 論文発表.....	19
6-4. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表).....	19
6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等.....	20
6-6. 知財出願.....	20

## 1. 研究開発プロジェクト名

社会的養護経験者（ケアリーバー）の社会的孤立を防ぎ、支援と繋がりながら自立を支える仕組みを創る

## 2. 研究開発実施の具体的内容

### 2-1. 研究開発目標

スモールスタート期間における達成目標は、自立を目前にした措置児童（入所児、里子）が抱えている不安要素、施設職員や里親が必要だと感じるリービングケア（退所に向けての支援）の在り方等について、措置児童や支援者を対象とした実態調査（インタビュー調査及びアンケート調査）を行い、社会的孤立に関連する要因を明らかにすると共に、人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法（指標等）を開発することである。

そして、ケアリーバーが抱える措置解除前後の困り事、求める支援、アフターケア担当者から見た孤立リスク要因と安定した社会自立に必要なスキル、ケアリーバーを雇用する職親が捉える早期離職に関連する要素、初職継続を可能にする環境等に関する調査分析より、「孤立」と対極にある「繋がり」を可能にするために必要な要素を描出する。

さらに発達障害等の体質・特性にも着目し、措置解除後に直面する困難、相談しにくい状況等について分析を行い、繋がりにくさの関連要因を明らかにする。並行して、アプリケーション（以下、アプリ）試作品を完成させ、モニター協力施設、里親と共にアプリの試行を開始し、試行の感想や改良点についてのヒアリングから、バージョンアップの方向性を把握し実行する。

本格研究開発期間における達成目標は、安全に繋がり情報提供や相談を可能にするために開発するモバイルメッセージングアプリケーションversion.1を完成しアップデートを重ねること、そしてそれらを用いて実際に都市部及び地方の2地域において試行し概念実証を行うことである。

ケアリーバーが繋がり続け、安心できる支援者に相談でき、必要な時に社会資源と繋げていける仕組みの構築が本プロジェクトで達成する最終目標である。

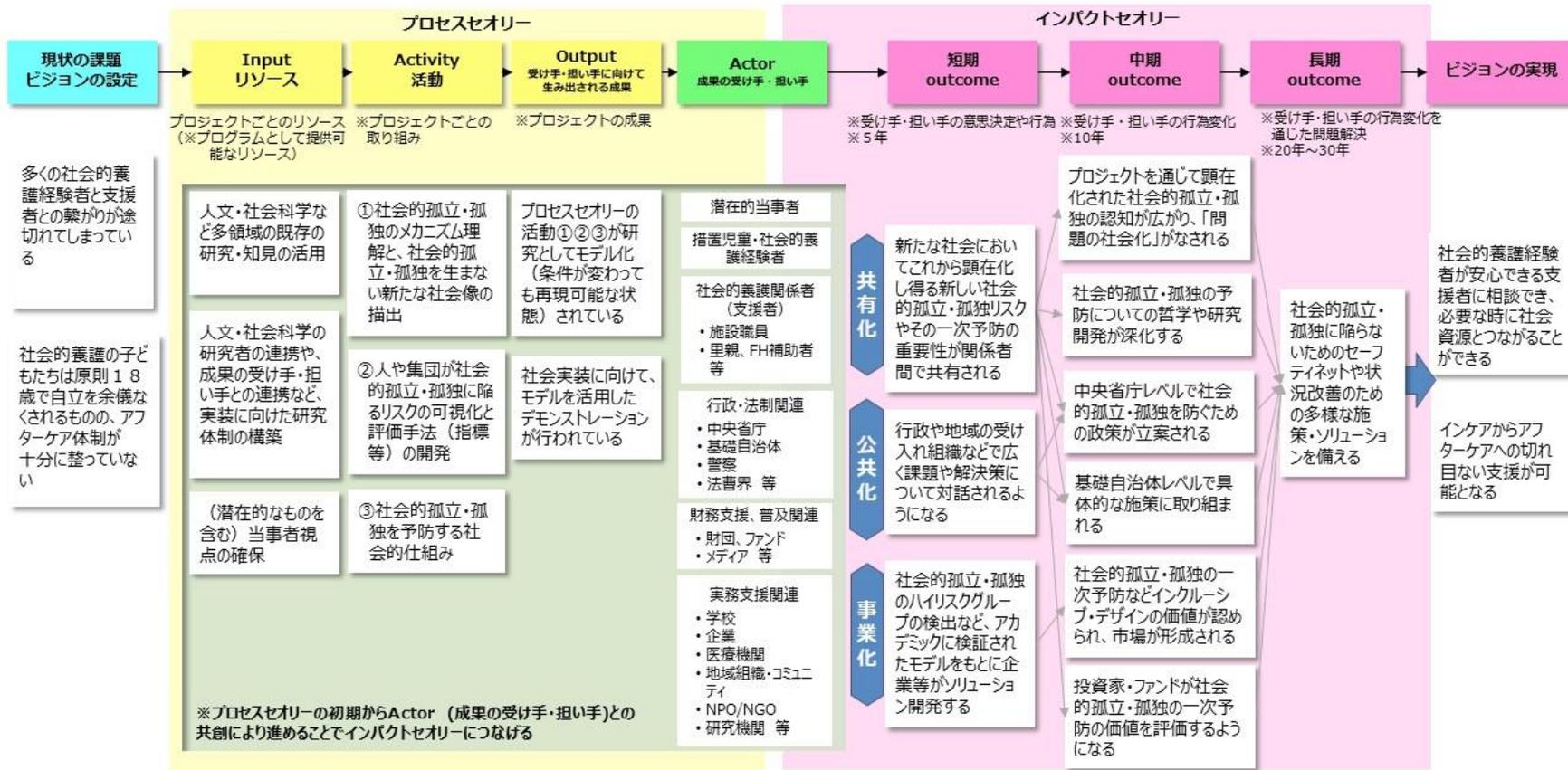
### 2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

Q1. 自立を目前にした措置児童が抱えている不安要素とは？

Q2. 社会的養護経験者と支援者との繋がり維持に関わる要因とは？

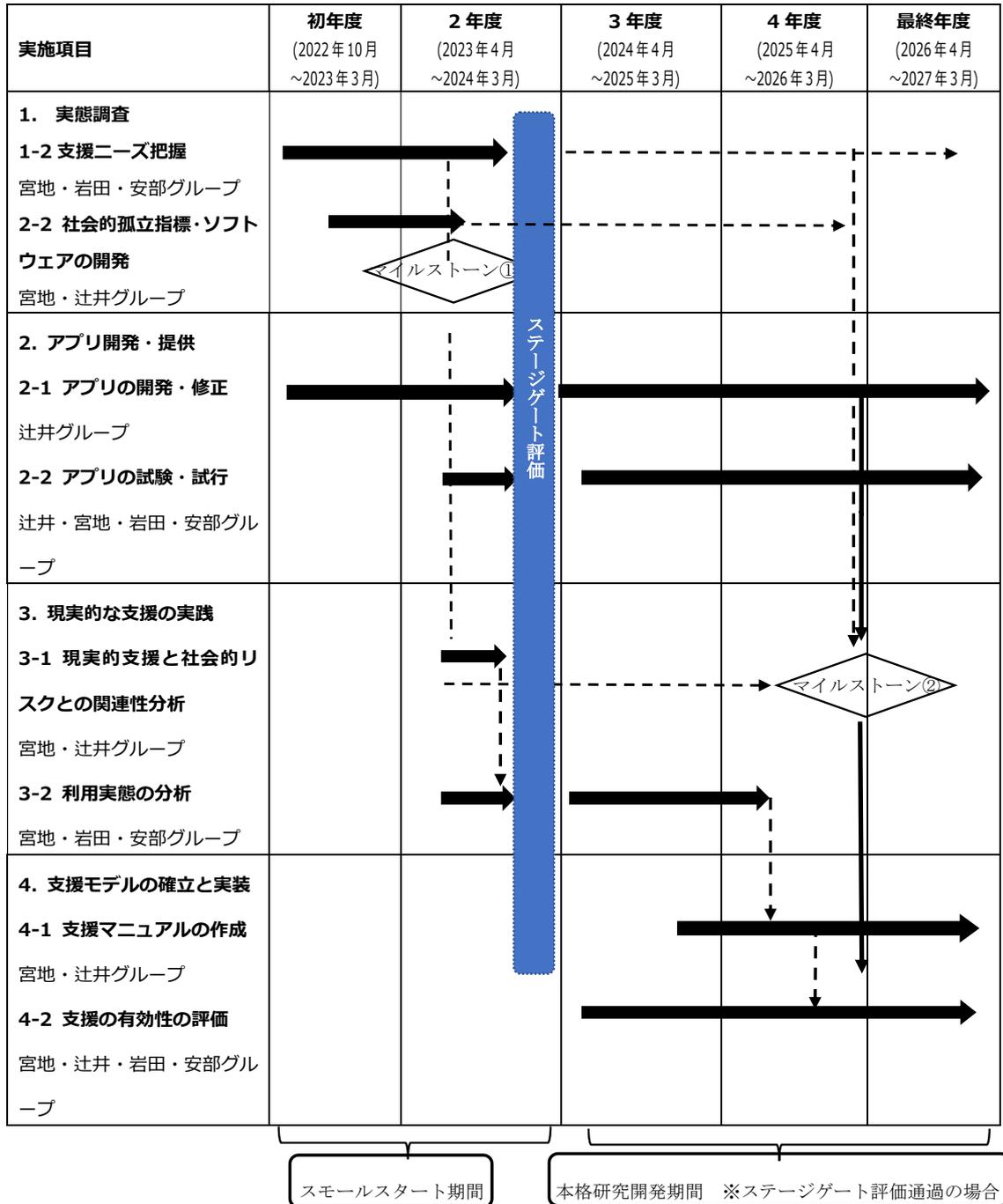
### 2-3. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)  
「社会的養護経験者(ケアリーバー)の社会的孤立を防ぎ、支援と繋がりながら自立を支える仕組みを創る」ロジックモデル



## 2-4. 実施内容・結果

### (1) スケジュール



### (2) 各実施内容

[当該年度の主な予定]

- ・2022年10月~12月： 調査B 依頼・実施
- ・2023年1月~3月： 調査A 依頼・実施

### 当該年度の到達目標①：

自立を目前にした措置児童が抱えている不安要素、施設職員や里親が必要だと感じるリビングケア（退所に向けての支援）の在り方について、入所児や支援者を対象とした実態調査（アンケート調査）を実施する。データ入力完了時期については2023年7月を予定とし随時進めていく。

そして、ケアリーバーが抱える措置解除前後の困り事、求める支援、アフターケア担当者から見た孤立リスク要因と安定した社会自立に必要なスキル、ケアリーバーを雇用する職親が捉える早期離職に関連する要素、初職継続を可能にする環境等に関する調査（アンケート調査）を実施する。

データ入力完了時期については2023年7月を予定とし随時進めていく。

### 研究開発要素①

#### 「社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出」

**実施項目：**実態調査①-1：支援ニーズ把握

**実施内容：**2種類の質問紙調査を予定。愛知県及び福島県内の措置児童に対して、社会的養護下で生活する子ども達が退所を前にどのような不安を抱えているのか等についての調査Aを実施し支援ニーズの整理を行うためのデータを収集する。当事者に回答を求める調査のため、目的を分かりやすく伝え、理解を得ることにポイントを置いて準備を行う。11月中には愛知県児童福祉施設長会、福島県児童養護施設連絡協議会、愛知県里親会連合会、福島県里親会等へ依頼文を送付し、理解ならびに協力を得ていく。

また、福島県内の支援者を回答者、2017年4月～2022年3月までの過去5年間のケアリーバーを対象者とした調査Bを実施し、ケアリーバーの現状を把握するためのデータを収集する。10月初旬には福島県児童養護施設連絡協議会、愛知県里親会連合会へ依頼文を送付し理解ならびに協力を得ていく。

**期間：**令和4年10月～令和5年3月31日

**実施者：**宮地菜穂子（同朋大学・准教授）・岩田正人（名古屋文化キンダーホルト・施設長）・安部郁子（福島大学・特任教授）・明翫光宜（中京大学・教授）等

**対象：**児童養護施設等入所児童・委託されている里子であり、高校等に通う児童・ケアリーバー・支援者（児童養護施設等の自立支援に携わる職員、里親等）

### 研究開発要素②

#### 「社会的孤立・孤独リスクの可視化と評価手法（指標等）の開発」

**実施項目：**実態調査①-2：社会的孤立指標・ソフトウェアの開発

**実施内容：**社会的孤立に関する先行研究について文献調査を行う。

**期間：**令和4年10月～令和5年3月31日

**実施者：**宮地菜穂子（同朋大学・准教授）・明翫光宜（中京大学・教授）等

### 当該年度の到達目標②:

マネージメントG及び自立支援運営G、福島支援運営Gより示されたアプリの機能、活用方法等に関するイメージやデザインをアプリ開発G実施者の曾我部が中心となって作成を進め、アプリ試作品を完成させる。ケアラーバーや施設関係者が繋がるためのアプリであるため、利用しやすいことが重要である。様々な既存のアプリの利便性を参照しつつ、できるだけ見やすく、操作が簡単なアプリにポイントを置いて作成を目指していく。

### 研究開発要素③

#### 「社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」

**実施項目:** アプリ開発・提供②-1: アプリの開発・修正

**実施内容:** アプリ試作品を作成し、他のプログラムリーダー等へ随時経過報告を行い、試作品をプログラムリーダー、実施者等の関係者間で共有する。

**期間:** 令和4年10月～令和5年3月31日

**実施者:** 曾我部哲也(中京大学・准教授)・辻井正次(中京大学・教授)・明翫光宜(中京大学・教授)等

### (3) 成果

#### 当該年度の到達点①:

(目標) 自立を目前にした措置児童が抱えている不安要素、施設職員や里親が必要だと感じるリビングケア(退所に向けての支援)の在り方について、入所児や支援者を対象とした実態調査(アンケート調査)を実施する。データ入力完了時期については2023年7月を予定とし随時進めていく。

そして、ケアラーバーが抱える措置解除前後の困り事、求める支援、アフターケア担当者から見た孤立リスク要因と安定した社会自立に必要なスキル、ケアラーバーを雇用する職親が捉える早期離職に関連する要素、初職継続を可能にする環境等に関する調査(アンケート調査)を実施する。データ入力完了時期については2023年7月を予定とし随時進める。

**実施項目:** 実態調査①-1: 支援ニーズ把握

#### 成果:

愛知県内および福島県内において実態調査を実施し、回収を終えている。入力が予定より早く完了した愛知県内で回収したデータの分析結果のみ、以下に概要を提示する。

## 調査 A

愛知県内の児童養護施設および児童心理治療施設 23 か所に措置されている 15 歳以上で高校生以上の措置児童を対象とした本人調査を実施したところ、22 施設から 150 ケース回収した（回収率 95.5%）。

集計したところ、全体の 76.9%は、アフターケアを望んでいることが明らかになった。また、措置児童の不安の程度と学年 3 区分のクロス集計を行ったところ、自立後の生活について、「高校 1 年生」では、67.8%が、「2 年生」になると、60.0%が、「3 年生その他」は、68.3%が不安を抱えていた。

☆「どのようなことを不安に思うのか？」と自由記述で尋ねたところ、92 人より回答を得た。類似する内容をまとめた結果を図 1 に、回答例の一部を表 1 に示す。

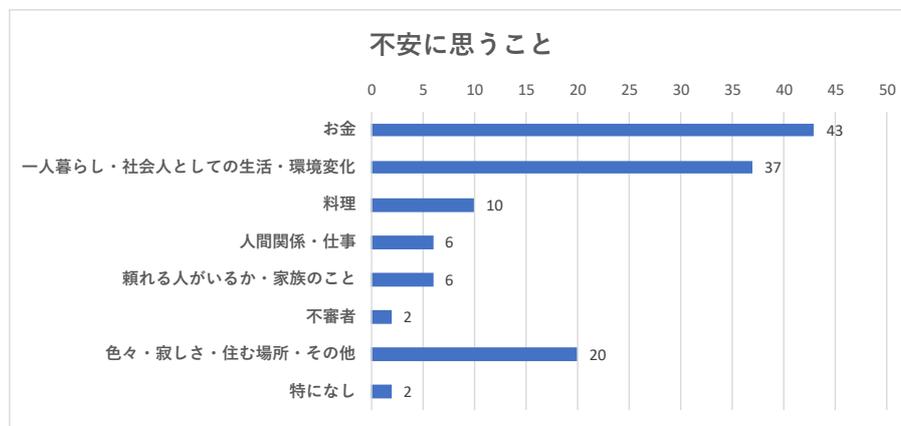


図 1 自立後の生活を考えたとき、どのようなことが不安ですかとの質問に対して、得られた自由記述回答の概要のとりまとめ

表 1 「どのようなことを不安に思うのか？」への回答（自由記述）例

<ul style="list-style-type: none"> <li>・お金が足りるか不安</li> <li>・急に大金を持つ事になり、お金の使い方が困ってしまう</li> <li>・家事とか一人でやっていけるか心配・生活・仕事</li> <li>・一人で暮らしたことが今までないのでやっていけるかどうか不安</li> <li>・あんまり施設を出たことを思い浮かべれないし、普通の生活というのがよく分からない</li> <li>・自分で一人で生活できるか</li> <li>・全部一人でやれる自信がない</li> <li>・どう生きていけばいいのかわからない</li> <li>・社会人としての生活が想像できない</li> <li>・とにかくただただ不安</li> <li>・ゆうれいや、どろぼうが来ないか</li> <li>・不審者とかが来たときにきちんと対処できるか不安</li> <li>・税金や法律などがほぼ無知なのでこわい</li> <li>・寂しくならないか心配…</li> </ul>
---

※ 基本的に回答の表現のまま掲載

### 結果から得られた気づきや新たに発見・判明した課題

「とにかくただただ不安」、「どう生きていけばいいのかわからない」といった漠然とした不安を抱えている現状が示唆された。施設での生活から一人での生活が想像できないことがその根本にあり、全てを自分一人でやらなければならないと思うからこそ、不安がより大きくなっているのではないだろうかとも考えられた。入所中から措置解除後の生活をイメージできる機会（リービングケア）を提供しつつ、措置解除後も“相談しながら”、“慣れるまで伴走していく”という支援体制があれば、安心感に繋がり、こうした漠然とした不安は軽減される可能性があるのではないかとといった仮説と支援の方向性が見出された。

今後の課題は、次年度、実施予定の措置児童を対象としたインタビュー調査において、こうした漠然とした不安の背景には何があるのか、さらに不安ではない場合にはどのような理由があるのか等、不安の有無を左右する関連要因について質的に検討し明らかにしていくと共に、繋がり続けられる支援体制の構築の実装に向けて示唆を得ていくことである。

### **調査B**

福島県内の児童養護施設全8か所へ調査票を配布した。回収率については、全8施設中、7施設より回収できたが、1施設から対象児童数に関する回答も得ることができず、正確な調査対象者数を把握できていない。そのため、正確な数値の算出は現時点で不可能な状況にある（施設回収率は87.5%）。有効回答数は129ケースであった。

対象者は、福島県内に設置されている児童養護施設8か所に措置されていた児童の内、2017年4月～2022年3月の過去5年間に15歳以上で退所した者である。

回答者は、対象者が入所していた児童養護施設において勤務し、対象者の退所前後の状況を把握している職員である。

分析においては、愛知県における先行研究（宮地：2018<sup>1</sup>）との比較を視野に入れ、同様な分析手法を用いて、予備的検討を試みた。社会自立に対する経済的アプローチ、すなわち労働を切り口とした評価にあたり「正社員」という雇用形態及び、「初職（初めて就いた職）の継続状況」の2点に着目し、これらを経済的な自立状態の指標として、施設退所者の社会自立に関連する要因を明らかにすることを目指した。その上で、社会的養護の枠組みの中で退所後の自立支援を展開するために欠かせない施設退所者（社会的養護経験者）と施設との繋がりについて連絡先「不明不通」状態との関連要因を探った。

多変量解析により探索的に明らかにすることを目指した結果、退所年が早い者（退所して時間が経過した者）ほど不明・不通になりやすく、「女性」、「アルバイト経験がない者」、「初職を継続できていない者」は、不明・不通になる傾向にあることが示唆された。また、「在籍期間の短い者」、「発達障害の疑い・診断の無い者」、「非行歴の無い者」、「(学歴において)中退していない者」ほど、正社員になっており、「アルバイト経験のある者」は正社員になっている傾向が示された。さらに、「中退していない者」ほど、初職を継続できていることが示された。

ただ、福島データにおける検討では、非行歴の有無および中退（学歴）は、正社員か否か

<sup>1</sup> 宮地 菜穂子（2018）「児童養護施設等退所児童の社会自立に関連する要因：児童養護施設等における自立支援のための施設退所者実態調査結果より」『子ども家庭福祉学』18, 54-67.

と相関が高いものの、非行歴の有無と中退(学歴)との間で特に相関が高い訳ではなかった。これらの分析結果から、福島県における社会的養護経験者の社会自立の現状および社会的養護経験者と支援者との繋がりの維持に関わる要因について重要な示唆を得た。

### 結果から得られた気づきや新たに発見・判明した課題

時間の経過と共に繋がりが切れてしまう点、およびアルバイト経験がない者で繋がりが切れやすい傾向になる点については、愛知県内における先行研究<sup>1</sup>の結果に沿うものであったが、非行歴や発達障害、在籍年数など、相違点も複数確認された。

今後の課題としては、本データに関するより詳細な分析を行うと共に、本調査と同時期に実施した愛知県内調査との比較検討を試み、2地域の相違点について検討を行うことである。

## 実施項目：実態調査① - 2：社会的孤立指標・ソフトウェアの開発

### 成果：

#### 孤独に関する心理学的研究の動向

本研究では、我々の研究プロジェクトであるケアリーバーの社会的孤立問題に向けて、代表的な孤独感研究についてレビューし、ケアリーバーの社会的孤立について把握を行うことを目的とした。

孤独感の心理学的測定について、Russell (1996) は質問文の表現をより簡潔にした UCLA 孤独感尺度第3版を開発した(20項目)。第3版の短縮版(16項目版、11項目版、10項目版、8項目版、7項目版、6項目版、5項目版、4項目版、3項目版)の動きもある。Alsubheen et al (2021) のレビューによれば、4項目版、6項目版、7項目版、10項目版が最も頑健な内的構造を有していると指摘していることから、今後、改訂 UCLA 孤独感尺度第3版短縮版の選定の参考になるであろう。

孤独感研究の近年(2010年以降)の動向は、メンタルヘルス研究では、孤独感は反芻と特性不安を媒介して抑うつに影響するという結果(Zawadzki et al, 2013)、精神疾患を対象にした研究では、境界性パーソナリティ障害群が健常群と比較して孤独感が有意に高く、その程度は社会的ネットワークの大きさ、社会的関わり、向社会行動と関連が示されたこと(Liebke et al, 2017)、統合失調症に関する研究では孤独感は抑うつ症状および陰性症状と正の相関関係が、社会的機能とは負の相関関係が示され、孤独感は重要な治療対象であることがわかった(Culbreth et al, 2021)。

ケアリーバーの自立生活に関する主観的な認識や経験についてのレビューでは、ケアリーバーの多くは雇用や頼れる他者を見つけることへの課題に直面し、自立生活への移行を支えるものとしてケアリーバーの個人的特徴、ケアの特徴、優れた教育、安全な生活のための前提条件、社会的サポートなどが挙げられている(Häggman-Laitila et al, 2019)。ケアリーバーの孤独感を課題として挙げている研究はいくつかみられる。例えば、社会的孤立や孤独感によってケアリーバーが早く家庭を持ちたいと思うこと(Purtell et al, 2021)、成人形成期における自立への大きな壁として16人中12名が公営住宅に引っ越した時に孤独感と社会的孤立が重要な問題であり、リスクにもなりうるとインタビューで語られたこと

(Palmer et al, 2022)、自立に関して孤独感に対する恐怖を感じつつも、ポジティブな意味としてソリテュード (solitude) を語る研究 (Bengtsson et al, 2018)、社会的サポートの不足と孤独感が語られること (Sulimani-Aidan, 2014)、ピアサポートやポジティブな仲間関係の形成が、ケアリーバーにとってサポートイブな社会的ネットワークの構築と社会的孤立や孤独感の予防につながるといった指摘 (Witnish, 2017) など研究の中に孤独が取り上げられはじめている。しかし、それぞれの研究は孤独感をテーマにした研究ではなく、自立生活における研究の一部で語られた形となっており、ケアリーバーの孤独感の客観的把握が望まれる。

#### 文献

- Alsubheen, S. A., Oliveira, A., Habash, R., Goldstein, R., & Brooks, D. (2021). Systematic review of psychometric properties and cross-cultural adaptation of the University of California and Los Angeles loneliness scale in adults. *Current Psychology*, 1-15.
- Bengtsson, M., Sjöblom, Y., & Öberg, P. (2018). Young care leavers' expectations of their future: A question of time horizon. *Child & Family Social Work*, 23(2), 188-195.
- Culbreth, A. J., Barch, D. M., & Moran, E. K. (2021). An ecological examination of loneliness and social functioning in people with schizophrenia. *Journal of abnormal psychology*, 130(8), 899-908.
- Häggman-Laitila, A., Saloekkilä, P., & Karki, S. (2019, October). Young people' s preparedness for adult life and coping after foster care: A systematic review of perceptions and experiences in the transition period. In *Child & Youth Care Forum* (Vol. 48, pp. 633-661). Springer US.
- Liebke, L., Bungert, M., Thome, J., Hauschild, S., Gescher, D. M., Schmahl, C., ... & Lis, S. (2017). Loneliness, social networks, and social functioning in borderline personality disorder. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, 8(4), 349-356.
- Palmer, A., Norris, M., & Kelleher, J. (2022). Accelerated adulthood, extended adolescence and the care cliff: Supporting care leavers' transition from care to independent living. *Child & Family Social Work*, 27(4), 748-759.
- Purtell, J., Mendes, P., & Saunders, B. J. (2021). Where Is the village? Care leaver early parenting, social isolation and surveillance bias. *International Journal on Child Maltreatment: Research, Policy and Practice*, 4, 349-371.
- Russell, D. W. (1996). UCLA Loneliness Scale (Version 3): Reliability, validity, and factor structure. *Journal of personality assessment*, 66(1), 20-40.
- Sulimani-Aidan, Y. (2014). Care leavers' challenges in transition to independent living. *Children and Youth Services Review*, 46, 38-46.
- Witnish, B. (2017). *Young Care Leavers: the need for peer support*.
- Zawadzki, M. J., Graham, J. E., & Gerin, W. (2013). Rumination and anxiety mediate the effect of loneliness on depressed mood and sleep quality in college students. *Health Psychology*, 32(2), 212-222.

## 結果から得られた気づきや新たに発見・判明した課題

孤独感の心理社会的影響はかなり強いことが先行研究からはっきりしている。一方で、本研究プロジェクトで対象としているケアリーバーについては、健全な社会的なネットワークを形成することがその後の適応に大きく作用することも先行研究から明らかとなっている。しかし、ケアリーバーの追跡調査は日本では皆無といえる状況であり、本研究プロジェクトにてサポートしながら追跡調査をしていくことの必要性を再認識すると共に、今後の重要な課題であると、研究の動向を概観し、改めて気づかされた。

## 当該年度の到達点②：

(目標) マネージメント G 及び自立支援運営 G、福島支援運営 G より示されたアプリの機能、活用方法等に関するイメージやデザインをアプリ開発 G 実施者の曾我部が中心となって作成を進め、アプリ試作品を完成させる。ケアリーバーや施設関係者が繋がるためのアプリであるため、利用しやすいことが重要である。様々な既存のアプリの利便性を参照しつつ、できるだけ見やすく、操作が簡単なアプリにポイントを置いて作成を目指していく。

## 実施項目：アプリ開発・提供②-1：アプリの開発・修正

### 成果：

アプリのプロトタイプ開発をすすめた。まずは利用者種別の割り出しをおこなった。

特に個人情報などに関わる内容として、施設や里親会等内部で扱う情報と、施設等をまたいで県（措置自治体）レベルで扱う情報の区別や検討、“ケアリーバー”と“施設で生活する措置解除の近い措置児童”や、“ケアリーバーおよび措置児童”と“支援者”の情報アクセス制限の違いなどを検討した。次にワイヤーフレーム（レイアウトのようなもの）を作成した。チュートリアル画面から本登録画面までの流れ、普段の利用画面などのデザインやその流れなどを検討した。またサーバを選定したうえでテスト環境の構築をおこない、認証方式の検討や動作確認を実施した。



### 結果から得られた気づきや新たに発見・判明した課題

アプリ試行品を活用した試行を開始するための準備は、ほぼ計画通りに遂行できている。様々な検討を行う中で、試行から社会実装に至るまで、モニターや利用者へのプロジェクト趣旨等の説明と研究同意を得ながら進める必要がある。

例えば本プロジェクトで想定するチャットは、一部は支援者同士で利用し、一部は施設(里親会)内でのみ利用する予定である。ここまではよくある業務用チャットとほぼ同じであるが、ケアリーバーの参加領域ではケアリーバー同士の交流を制限する必要があるため、それを前提に制作している。

そこで、ケアリーバーのプロフィールについても、プロフィール欄やプロフィール画像を使って連絡先を教えたりアルバイト募集をしたりすることが想定されるため、見せる範囲を制限する必要がある、どこまで制限すべきかについて検討している。

こうしたことから個人情報を保護しつつ、必要な情報を関係者間で効率的に共有し支援に活用していける仕組みを構築するために、弁護士等法律の専門家および現場の支援者、研究者との丁寧な協議を重ね、研究同意書を完成させ、試行に入ることが次年度の課題である。

また、このアプリではプラットフォームを提供し、ある程度は支援者側で自由に運用ができることを想定しているが、その操作が複雑になったり手数が増えたりするとアプリ自体を使っただけでない可能性がある。そこで、他の事例などではユーザー会を設け、開発者と利用者が集いながらエバンジェリスト的な役割を担うことが良いとされているが、スタートと同時にこうしたものを作ることも検討しなければならないと考えている。

#### (4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

##### **Q1. 自立を目前にした措置児童が抱えている不安要素とは？**

措置児童本人を対象とした調査によって得られた非常に貴重なデータからは、お金・一人暮らし自体・頼れる人がいるかという不安要素を抱えていることが把握できた。一人で暮らすという生活自体を想像することが難しく、金銭面に不安を抱えると共に、どう生きていけばいいのか?ととにかく不安…といった漠然とした不安を抱えている現状も示唆された。

さらに検討を深めるべき課題は、自立を控えた措置児童を対象としたインタビュー調査において、不安である、あるいは不安ではない背景には何が関連しているのかについて、質的に検討し明らかにしていくことである。

## Q2. 社会的養護経験者と支援者との繋がり維持に関わる要因とは？

福島県内における実態調査を基にした分析の結果からは、退所して時間が経過した者が不明・不通になりやすいことが明らかになった。また女性、アルバイト経験がない者、初職を継続できていない者が不明・不通にある傾向があることが示唆された。初職を継続できていない者は、中退している者である可能性が高く、中退している者は正社員以外の雇用形態である可能性も示唆されている。

初職を継続できなかった者は職場を失うと共に住居を失う可能性も考えられ、困難な状況に置かれることが予想される。再就職のための支援が求められ、より繋がり維持の必要性が考えられる。初職を継続していけるような支援、また初職を継続できなかった際に、支援者からの積極的な関わりが繋がり維持に寄与する可能性があると考えられた。

今後、検討を深める課題として、時間の経過と共に繋がり切れていく点、初職を退職した際のサポートの在り方についての把握が必要であると認識している。次年度以降予定されているインタビュー調査等による質的検討を行っていく予定である。

### (5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

**研究開発要素①**では、福島県における社会的養護経験者の実態について、福島県における社会的養護経験者と支援者との繋がり維持に関わる要因を検討し明らかにした。次年度に向けて、愛知県との比較検討を行い、都市部と地方との現状の相違点・類似点について分析を行う。また、予定より早くデータ入力完了した愛知県内の措置児童調査データの集計結果を基にした検討から、自立を目前にした措置児童が抱えている不安要素について仮説と支援の方向性を見出した。計画では調査Aおよび調査Bのデータ入力完了時期を2023年7月としており、施設関連の調査・分析は当初予定よりも早く進行している。

一方、愛知県および福島県内の里親および里子を対象とした調査に関しては、調査Aでは愛知県・福島県共に調査を依頼し実施準備の段階であり、計画よりも若干進行が遅れている。調査Bの方の里親データは、回収は完了しており、予定通りデータ入力中である。

なお分析結果については、随時、論文化し発表していく予定である。

**研究開発要素②**では、社会的孤立に関する先行研究について文献調査を行い、「孤独に関する心理学的研究の動向」をまとめた。計画通り進んでおり、今後、論文化し発表していく予定である。

**研究開発要素③**では、マネジメントG及び自立支援運営G、福島支援運営Gより示されたアプリケーションの機能、活用方法等に関するイメージやデザインについてとりまとめると共に、アプリ開発G実施者の曾我部が中心となって作成を進め、アプリ試作品を完成させるため、ほぼ計画通りに進行している。

アプリ名を、“きずな” + “繋がり（コネクト）” + “ネットワーク” から「きずなコネクト」と命名、ドメインをkizuna-con.netに決定し、ドメイン取得も完了した。作成したマスコットキャラクターを「朋うさ」と命名し、ホームページやアプリ内で活用していく準備を進めている。

開発用PCおよび実証端末等の選定、購入の手続き、採用するサーバの選択、開発環境等を選択、決定しながら、予定通り、アプリ試作品の開発が進行している。なお、アプリ試作品の試行時期に合わせてホームページも公開する予定である。

次年度に向けてアプリ試作品の試行を行い、不具合や使いにくさ等を把握し、改良の方向性を見出すことが課題である。

以上、全体的に計画通り順調にプロジェクトが遂行されている。開発の方向性としては、実施項目の実態調査①-1で明らかになった支援ニーズ踏まえて、実施項目のアプリ開発・提供②-1に反映させ、社会実装を進めていく。

## 2-5. 会議等の活動

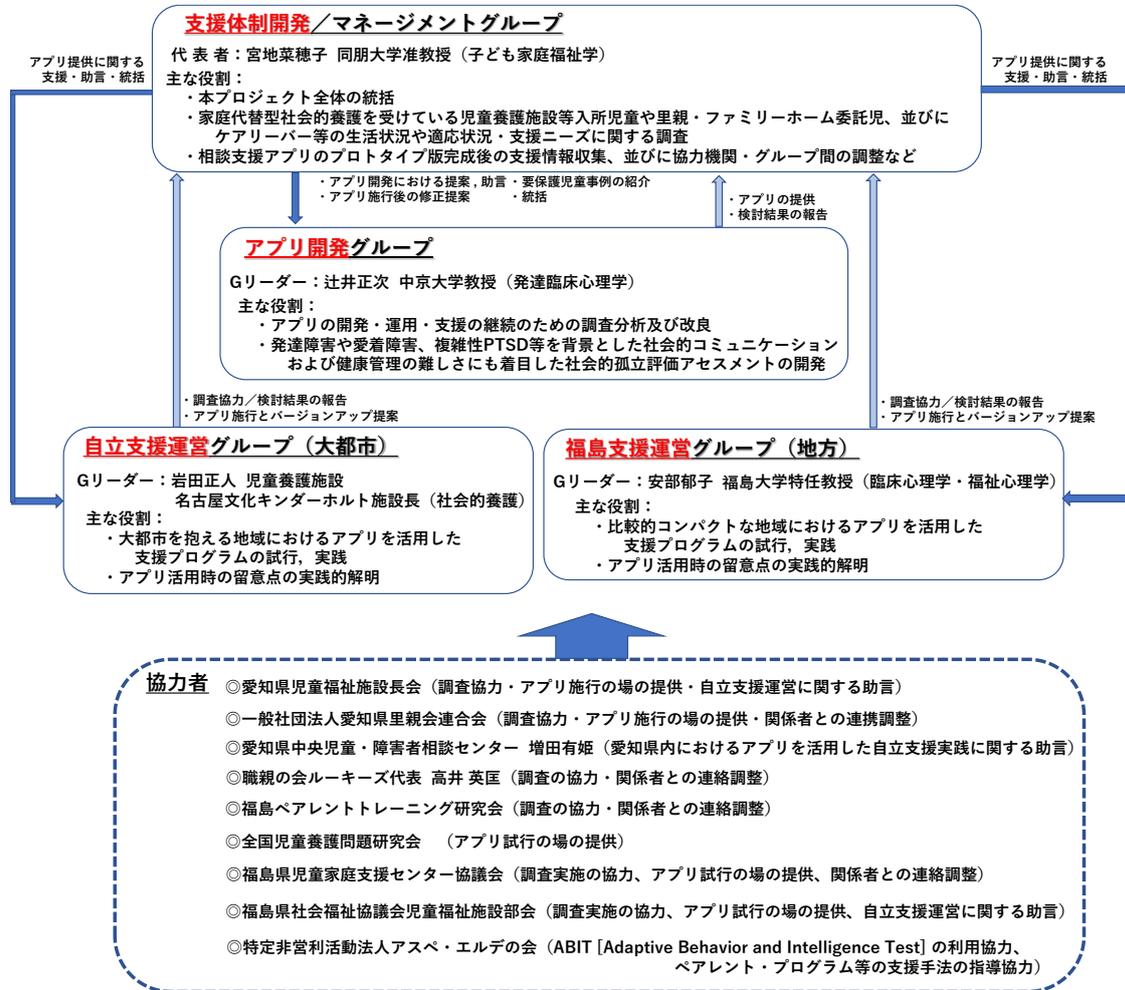
年月日	名称	場所	概要
2022年10月 22日	グループリーダー 一會合	東京都御茶ノ 水	プロジェクト進捗状況及び実態調査の進め方についての共有

※上記以外に各グループ内、グループリーダー間で複数回の研究会合を実施しているが、それらについては割愛

## 3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

本研究課題は、愛知県児童福祉施設長会・福島県児童養護施設連絡協議会等、社会的養護現場の支援者が組織する団体、地方自治体関係者との連携体制の中で実施しており、研究開発成果を現場で活用する体制が整っている。ただ、当該年度は開発期間の短さから、先行研究を概観した上で、現状把握のための実態調査・文献調査の実施およびアプリケーション試作品の開発が主な作業であった。次年度は当該年度に実施した調査の分析から得られた知見を具体的な取り組みに活用していく予定である。

## 4. 研究開発実施体制



### (1) 支援体制開発/マネジメントグループ

- ①宮地菜穂子（同朋大学 社会福祉学部 准教授）
- ②実施項目1：実態調査

グループの役割の説明：本グループにおいては、実態調査全体のマネジメントを行いつつ、分析、支援ニーズ把握および社会的孤立指標・ソフトウェアの開発を進めていく。

#### 実施項目2：アプリ開発・提供

グループの役割の説明：本グループにおいては、アプリ開発グループの開発スケジュールを管理しつつ、アプリケーション試作品の試験・試行を行う。

実施項目3：現実的な支援の実践

グループの役割の説明：本グループにおいては、計画的に実施されるよう、関係者間との調整を図りつつ、現実的支援および社会的孤立リスクとの関連性分析を行う。

実施項目4：支援モデルの確立と実装

グループの役割の説明：本グループにおいては、関係者からの意見を集約し、実用的且つ有効な情報を精査し、支援マニュアルを作成する。原稿の執筆、レイアウト等も担当する。また、支援の有効性の評価について、取りまとめを行う。

(2) アプリ開発グループ

①辻井正次(中京大学 現代社会学部 教授)

②実施項目1：実態調査

グループの役割の説明：本グループにおいては、実態調査データの分析および社会的孤立指標・ソフトウェアの開発にて、中心的な役割を担う。

実施項目2：アプリ開発・提供

グループの役割の説明：本グループにおいては、アプリケーション試作品の開発・修正を実行する。またアプリの試験・試行にて、中心的な役割を担う。

実施項目3：現実的な支援の実践

グループの役割の説明：本グループにおいては、他のグループと連携しながら現実的支援の状況を把握し、社会的孤立リスクとの関連性の分析を行い、分析結果を取りまとめる。

実施項目4：支援モデルの確立と実装

グループの役割の説明：本グループにおいては、主にアプリやソフトウェアの活用部分についての支援マニュアル執筆を行う。また、支援の有効性の評価とその結果を取りまとめる。

(3) 自立支援運営グループ

①岩田正人(名古屋文化キンダーホルト 施設長)

②実施項目1：実態調査

グループの役割の説明：本グループにおいては、愛知県内にて支援ニーズ把握のための各種実態調査を実行する。スムーズに調査が進められるよう、関係者との連絡・調整を行う。

実施項目2：アプリ開発・提供

グループの役割の説明：本グループにおいては、愛知県内にてアプリの試験・試行に際して、現場関係者との連絡・調整を行う。

実施項目3：現実的な支援の実践

グループの役割の説明：本グループにおいては、特に愛知県内の関係者の利用実態および利用しての感想等、リアルな現場の声を他のグループと共有し、利用実態の分析を行う。

実施項目4：支援モデルの確立と実装

グループの役割の説明：本グループにおいては、愛知県内の支援に関して他のグループと連携しながら、支援の有効性の評価を行う。

#### (4) 福島支援運営グループ

①安部郁子(福島大学 人間発達文化学類 特任教授)

②実施項目1: 実態調査

グループの役割の説明: 本グループにおいては、福島県内にて支援ニーズ把握のための各種実態調査を実行する。スムーズに調査が進められるよう、関係者との連絡・調整を行う。

実施項目2: アプリ開発・提供

グループの役割の説明: 本グループにおいては、福島県内にてアプリの試験・試行に際して、現場関係者との連絡・調整を行う。

実施項目3: 現実的な支援の実践

グループの役割の説明: 本グループにおいては、特に福島県内の関係者の利用実態および利用しての感想等、リアルな現場の声を他のグループと共有し、利用実態の分析を行う。

実施項目4: 支援モデルの確立と実装

グループの役割の説明: 本グループにおいては、福島県内の支援に関して他のグループと連携しながら、支援の有効性の評価を行う。

## 5. 研究開発実施者

### 支援体制開発/マネージメントグループ(リーダー氏名:宮地菜穂子)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職(身分)
宮地 菜穂子	ミヤチ ナオコ	同朋大学	社会福祉学部	准教授
高柳 伸哉	タカヤナギ ノブヤ	愛知教育大学	心理講座	准教授
浜田 恵	ハマダ メグミ	名古屋学芸大学	ヒューマンケア学部	准教授
杉山 文乃	スギヤマ アヤノ	NPO法人アスペ・エルデの会	放課後等デイサービス 音色	児童指導員
下手 花音	シモテ カノン	NPO法人アスペ・エルデの会	児童発達支援事業所 ぷちば	児童指導員
木下 詩織	キノシタ シオリ	同朋大学	社会福祉学部	特任研究員

### アプリ開発グループ(リーダー氏名:辻井正次)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職(身分)
----	------	------	------	--------

辻井 正次	ツジイ マサツグ	中京大学	現代社会学部	教授
明翫 光宜	ミョウガン ミツノ リ	中京大学	心理学部	教授
曾我部 哲也	ソガベ テツヤ	中京大学	工学部	准教授
伊藤 大幸	イトウ ヒロユキ	お茶の水女子大学	基幹研究院 人間科学系	准教授
石川 道子	イシカワ ミチコ	NPO法人アスペ・ エルデの会		臨床統括デ ィレクター
香取 みずほ	カトリ ミズホ	NPO法人アスペ・ エルデの会	児童発達支援事 業所 奏音	児童指導員
類沢 晃子	ルイザワ アキコ	中京大学	工学部	研究補助員
大江 涼夏	オオエ スズカ	中京大学	心理学部	パート
高石 菜摘	タカイシ ナツ	中京大学	心理学部	パート

自立支援運営グループ(リーダー氏名:岩田正人)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
岩田 正人	イワタ マサト	名古屋文化キンダ ーホルト		施設長
寺井 陽一	テライ ヨウイチ	中日青葉学園		学園長
柴田 和俊	シバタ カズトシ	光輝寮		児童指導員
千代 誠	センダイ マコト	名古屋文化キンダ ーホルト		自立支援相 談員
柴田 千香	シバタ チカ	西三河児童・障害 者相談センター		里親支援員
柴田 寿子	シバタ トシコ	愛知県里親会連合 会		会長

福島支援運営グループ(リーダー氏名:安部郁子)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
安部 郁子	アベ イクコ	福島大学	人間発達文化学 類	特任教授
鈴木 勝昭	スズキ カツアキ	ふくしま子どもの 心のケアセンター		副所長

遠藤 嘉邦	エンドウ ヨシクニ	福島愛育園		副園長補佐 兼自立支援 専門担当
鈴木 文	スズキ フミ	福島愛育園		里親支援専 門員
相原 政子	アイハラ マサコ	青葉学園		主任児童指 導員
五十嵐 敦子	イガラシ アツコ	青葉学園		家庭支援専 門相談員
大森 由衣子	オオモリ ユイコ	青葉学園		心理療法士
大河原 宏美	オオカワラ ヒロミ	福島大学	人間発達文化学 類	パート

## 6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要

### 6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

- (1) 書籍、フリーペーパー、DVD
- (2) ウェブメディアの開設・運営
- (3) 学会(6-4.参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

### 6-3. 論文発表

- (1) 査読付き (   0   件)
  - 国内誌 (   0   件)
  - 国際誌 (   0   件)
- (2) 査読なし (   0   件)

### 6-4. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)

- (1) 招待講演 (国内会議   0   件、国際会議   0   件)
- (2) 口頭発表 (国内会議   0   件、国際会議   0   件)
- (3) ポスター発表 (国内会議   0   件、国際会議   0   件)

#### 6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

- (1) 新聞報道・投稿 (  0   件)
- (2) 受賞 (  0   件)
- (3) その他 (  0   件)

#### 6-6. 知財出願

- (1) 国内出願 (  0   件)
- (2) 海外出願 (  0   件)